＜株式会社エフエム東京　第 487 回放送番組審議会＞

１．開催年月日：令和４年４月５日（火）

２．開催形式　：リモートにて開催

３．委員の出席：委員総数６名（社外６名　社内０名）

◇出席委員（6 名）

ロバート キャンベル　委員長　　秋　　元　　康　委員
川 上 未 映 子　委員　　佐 々 木 俊 尚　委員
松　田　紀　子　委員　　山　口　真　由　委員

◇欠席委員（0 名）

◇社側出席者（8 名）

唐　島　代表取締役会長
黒　坂　代表取締役社長
小　川　取締役
内　藤　執行役員編成制作局長
延　江　編成制作局ゼネラルプロデューサー
宮　野　編成制作局次長 兼 編成部長
若　杉　編成制作局制作部長
原　田　報道・情報センター部長

◇社側欠席者（0 名）

【事務担当　内藤放送番組審議会事務局長】

４．議題：番組試聴　（約 30 分）
『News Sapiens 緊急スペシャル～花はどこへ行った～』
3 月 9 日（水）20：00～20：50　放送のダイジェスト

≪議事内容≫
議題 1:最近の活動について

■『村上 RADIO 緊急特番 戦争をやめさせるための音楽』放送

TOKYO FM をはじめとする JFN 全国 38 局ネットでは、2022 年 3 月 18 日（金） 23:00～23:55、『村上 RADIO 緊急特番 戦争をやめさせるための音楽』を放送しました。ロシアによるウクライナ侵攻を受け、村上春樹氏から『村上 RADIO』番組チームに呼びかけがあり、急遽制作し、放送となりました。反戦ソングをはじめとする 10 曲を村上春樹氏が選曲。歌詞を翻訳し、時にメッセージも添えながらオンエア。大変大きな反響がありました。

（以下、村上春樹さん執筆の放送台本冒頭）
こんばんは。村上春樹です。村上 RADIO。今日は「戦争をやめさせるための音楽」というテーマで、番組をお送りしたいと思います。音楽に戦争をやめさせるだけの力があるのか？正直言って、残念ながら音楽にはそんな力はないと思います。でも聴く人に「戦争をやめさせなくちゃならない」という気持ちを起こさせる力はあります。今日は八曲か九曲の音楽をかけるつもりですが、それだけを聴き終えたとき、おそらくあなたはそれを耳にする前より、より強く「戦争をやめさせなくちゃならない」という気持ちになっているはずです。おそらく・・・。そのようなわけで、今日はうちにある CD やレコードの中から、僕なりに「戦争をやめさせるための音楽」というテーマに相応しいものを選んできました。ダイレクトな反戦歌も多いけれど、正確な意味では「反戦歌」とは言えないものもあります。しかし人の命や愛や尊厳を大切に護らなくてはならない、という内容の歌だって、広い意味での「反戦歌」ですよね。僕はそう思います。今日は歌詞が大切な要素になります。できるだけ精しく紹介したいと思います。じっくり聴いて下さい。

（オンエア楽曲）
1) James Taylor; Never Die Young (live)
2) The Weavers; Last Night I Had the Strangest Dream (live)
3) Dirty Dozen Brass Band faturing Bettye LaVette; What's Happening Brother
4) Bruce Springsteen; War
5) Eddie Grant; living on the Front Line
6) Stevie Wonder; Blowin' in the Wind
7) Peter,Paul & Mary; Cruel War
8) The Doors; Unknown Soldier
9) Jack Johnson; Imagine
10) Brian Wilson; Love and Mercy

【委員の意見および社側説明】
（「○」委員意見／「■」社側意見）

○「村上 RADIO」のような番組には、特にラジオの強みを感じる。これがテレビだったら、成立しない。パーソナリティが 1 人でしゃべり続けて音楽を流すだけという構成。それがダイレクトにリスナーと繋がるというパーソナル性の強さ。それはラジオの優位性だと思う。それを何十年もかけてずっとやってきたことは財産であり、テレビ局にも YouTuber にもできない。その優位性である音声に、動画やイベントを付けるなどの新しい取り組みはとても可能性があると思う。ラジオ局というものの再構築が強く求められている状況なのでは。

議題２：番組試聴
【番組名】
『News Sapiens緊急スペシャル～花はどこへ行った～』
3 月 9 日（水）20：00～20：50　放送のダイジェスト

【番組概要】
本日ご試聴いただくのは、3 月 9 日（水）に放送した『News Sapiens 緊急スペシャル～花はどこへ行った～』のダイジェストです。
パーソナリティは音楽評論家で DJ のピーター・バラカン氏。深刻化するウクライナ情勢の中で「私たちが今何をできるのか」をテーマに、これまで歌い継がれてきた数々の反戦ソングとともにお届けしました。番組では、ウクライナ出身・日本在住のバンドゥーラ奏者・カテリーナ氏をゲストに招き、ロシアやウクライナへの想いを伺い、ジョン・レノンの「Imagine」を生演奏で披露していただきました。サックス奏者・坂田明氏は、ヘンリー・マンシーニ作曲「ひまわり」の生演奏を披露。坂田氏は以前、チェルノブイリ原発を訪れ、現地の病院で放射能障害と戦う人々の前で、この曲を演奏した経験を持ちます。そして、数々のロシア文学の翻訳や研究を行っている沼野恭子氏からは、今のウクライナ情勢をどう見つめているのかを文学者の視点で語っていただきました。
バラカン氏は「このウクライナ情勢の中で、反戦歌を（ラジオで）かけることにどこまで意味があるのかというと、残念ながらあまりないと思います。ウラジミール・プーチンがこうした曲を聴いても、我々のことを笑ってしまうだけでしょう」とシニカルに語り、「自己満足かもしれませんが、なんとなくこうした曲を聴きたくなるものです」と番組を締めくくりました。

▲「imagine」を演奏中のカテリーナ氏

【委員の意見および社側説明】
（「○」委員意見／「■」社側意見）

○大変興味深く拝聴した。ウクライナの問題は、テレビでは「プーチンが悪だ、ゼレンスキーがヒーローだ」という構図で非常に単純化されている。この番組でパーソナリティのピーター・バラカン氏が、「ウクライナとロシアの歴史は非常に複雑なもので簡単にはまとめられない」と言っていたが、複雑なものを複雑なまま捉えるという視点に誠実さを感じた。また、ゲストの沼野氏が「戦争というものは共感を奪う」と言っていたことも、なるほどという視点があった。

○ラジオはパーソナルなものであることを前提とすると、もう少し小さなことにフォーカスをしても良かったと思う。カテリーナ氏に「プーチンをどう思うか」「ロシア人をどう思うか」と問うのはとても大きな質問だと思う。それを日本人が聴いても、共感のキッカケを探すことが難しい。例えば、チェルノブイリの原発事故が起こった 2 か月後に生まれた少女の母親にその時何を思い、何を願ったか、何を心配したかを聴くように、具体的なエピソードを聴きたかった。坂田氏の演奏は素晴らしかったが、「プーチンはヒトラーだ」というような発言は、非常に大きなコメント。坂田氏が演奏のために訪れた病院で会った子どもたちについての具体的な話があったほうが、そこに生きている人たちのことを、リアリティを持って想像でき、共感が生まれるキッカケや、戦争を違った形で捉えられたかと思う。

○「戦争が早くなくなればいいと思う」という街の声を入れたのはどういう意図なのかと思った。自分が対岸にいるということを突き付けられているように感じた。

○とてもバランスの取れた番組だと感じた。パーソナリティのトーンも落ち着いていて、今このような放送を行う無力感、何もできないことに対するうっすらとした嫌悪感やジレンマが漂っていた。戦争が始まってすぐの 3 月冒頭の放送ということを考えても意味があると思う。

○このようなテーマの番組は、多様性の時代ということもあり、様々な視点を取り入れて、誰が聴いても減点がないようにする、または、逆にこの人の意見を聴くといったパーソナルな方向に寄せるなどの演出があると思うが、ラジオでオンエアすることを考えた時に、誰からも文句が出ないよく考えられた構成だったと思う。全体として諦めというか、諦念というか、「今の私たちには何もできませんね」という状況、今できることの最善策が保存された、メッセージされた

という印象を受けた。私たちは今、日本にいる。その中でこういう番組を作るチャレンジと葛藤が伝わって来た。

○番組で使用していた楽曲の選曲にも、私たちは眺めることしかできない、という諦めのようなものが表れていたと思う。他の委員の意見にもあったが、漠然とした問いが多かったので、本人たちの言葉で話すもう少し個人的な話があればもう少し心に響く番組になったのでは。また、所々に入る日本人のコメントが「大変ですよね」ということに終始していたのが、対岸の火事というか、当事者意識のあるパーソナリティとの温度差を強調していたように感じる。この温度差こそが、3 月 9 日時点での日本の姿というところが切り取られた番組だったようにも思う。時間が経ってどうなっていくのか、もっと踏み込んだらどうなるのか、続編などを制作するなら聴いてみたいと思う。

○ピーター・バラカン氏は、「反戦歌をかけてどこまで意味があるのか」と言っていたが、その前段で、「アメリカの反戦歌というのは概ね 1960 年代に作られている、ベトナム戦争が泥沼にはまっていた時代で、当時アメリカには徴兵制があったので若者はいつ自分が戦場に送り込まれるのかという危機感の中で他人事ではなくこういう曲を作った」とも言っている。ベトナム戦争が終わった 70 年代後半以降も反戦歌は作られたけれど、60 年代ほどの真剣さは感じられない。戦争に対する当事者性は重要なことだと思う。日本の反戦運動はベトナム戦争の頃からずっとあるが、常に紋切り型。「戦争反対」「平和が大事」と言えばそれっぽくみえるというステレオタイプであり、当事者性のかけらもない。日本が運よく戦後徴兵制が敷かれることもなく、アメリカの抑止力の傘に守られ、安全保障条約により戦争をすることなく、20 世紀の間は特に東アジアも平和だった。それが、2022 年現在、ウクライナへの侵攻という事態になって、ウクライナ国民、ロシア国民にとって「反戦」を掲げることイコール命に関わるようなことになってきている。今、日本にいる我々にとって「反戦」とは一体どういうことなのか、どういう当事者性があっての「反戦」なのか、もう少し踏み込んだ番組作りでも良かったと思う。

○東アジアが奇跡的に平和だった 20 世紀と比べると、ロシアも中国も北朝鮮も攻撃的になっている。日本と友好的な台湾では、世論調査をすると、いざという時、アメリカに頼れないので自衛隊に来てほしいという声が 6 割に上るという。ウクライナの状況を呑気に「戦争反対」といって済まされる時代ではないのかもしれない。反戦歌自体は大切で、「戦争反対」と訴えることはとても大事なことだけれど、日本にとっての反戦は今、どういう意味になっているのかということを、もちろん今回の番組の中でやるべきかどうかは分からないが、聴いている側

に問題提起するくらいまでに踏み込んだことをメディアとして伝える機会があってもいいのではと思う。

○街の声を拾っていたが、可能ならば日本人だけではなく、日本にいるロシア人の声などが聴けたらと思った。

○冒頭でのピーター・バラカン氏の、「両者には複雑な問題があって」というコメントについて、別の委員から誠実さがあったという意見もあったが、プーチンが伝えたかったことに耳を傾けることに異議はないけれど、それが何なのかということをきちんと伝えることが必要だったと思う。それをきちんと言わないと、西側だけの意見ではないという喧嘩両成敗的に聴こえて、非常に無責任な反戦風という印象になる。

○この大きな問題に対して「自分たちには何ができるだろう」ということ、それは、それぞれだと思う。大きな力を起こして、戦争を止めるようなことはできないけれど、小さな力が集まっていくことこそが反戦なんだという意味では、この 3 月 9 日の時点でこの番組を作って放送したことに意味があると思う。様々なメディアが様々な形でウクライナの問題を伝える中、TOKYO FM としての反戦は音楽であると。「まず私たちにできるのは音楽を流すこと」ということに無力感があったとしても、たかがこんなことかもしれないけれど、何もしないよりはずっといい。

○業界の言葉に「街鳴り」という言葉がある。最近はみんな音楽をヘッドホンで聴いているので街鳴りがしないし、みんなが何を聴いているのか分からない。だから大ヒット曲が生まれないということもある。反戦歌は街鳴りしないといけない。TOKYO FM が音楽を通してこういうことを想っているということを発信するのはすごく大事なこと。アイドルが反戦歌を歌うこともある。たかがアイドルかもしれないし、アイドルが反戦歌を歌うことに反対意見もあるかもしれない。時に、こういった問題をビジネス利用しているんじゃないかという批判もあるだろう。しかし、そういう意見があろうが、どんなことをしようが、無視したりすることよりもずっといいと思う。そういう意味でもこの番組はとても良くできていたと思う。

○街の声に対しては他の委員からも意見があったが、大変難しいと思う。テレビでもそうだが、どの声を取り上げるかによって制作者の意図が強く入ってしまう。また、今の時代、質問された側からも、こういう答えをしなくてはいけない、というような回答しか出てこないのではないか。ものすごく多くの人から話を

聴くなら別だが、ディレクターや AD が 1 時間や 2 時間程度街頭で取材して、マイクを向けて話してくれた数人から選んだものを街の声というには無理があるのではと思う。

〇今回のウクライナ侵攻について、もちろん抜本的な解決ができることが理想だが、そんなことは誰にでもできることではない。できないならば、このような番組などでムードを作っていくことが大切だと思う。

■いろいろなご意見を頂き、大変参考になった。番組作りに反映したい。ご意見のあった街頭インタビューに関しては、実施した意図としては、番組に有識者や音楽家など、この問題について深く関わる人や詳しい人にご出演頂くにあたり、その対比として、市井で生きる、当事者ではない別の言葉が必要だと考え、実施したということがある。実際、街頭インタビューを実施してみて、通常の番組での街頭インタビューは、今話題になっていることなどについて、比較的すぐに答えが出てくる印象だが、本件に関しては、みなさんがまず「うーん」と口ごもり、時間をかけて答えていた。

6.議事内容を以下の方法で公表した。
①　放送:番組「ドライバーズインフォ」
4 月 30 日（土）5:55～6:00 放送
②　書面:TOKYO FM サービスセンターに据え置き
③　インターネット:TOKYO FM ホームページ内 https://www.tfm.co.jp/